

# 播磨のたたら製鉄研究を拓いた人たち —たたら製鉄研究史覚書—

大槻 守

はじめに

宍粟市千種町には指定文化財に指定されている史跡が七か所あり、そのうち六か所がたたら製鉄関係である。うち高保木たたら（製鉄）遺跡と天児屋鉄山跡は兵庫県指定文化財に指定されている。ことほど左様に千種ひいては宍粟ではたたら抜きには歴史は語れない。天児屋製鉄遺構は整備されてたたら公園となり、そばにはたたらの里学習館が設けられている。ここは鉄を吹いていた頃の時代へと誘ってくれるし、たたら製鉄体験学習も開かれていて、地元の中学生在が砂鉄採集からたたら製鉄までの学習をしていることで注目されている。また、ここを拠点に「宍粟鉄を保存する会」も活動し、たたらの啓発に努めている。

今、たたらが歴史だけではなく教育、観光など

の面からも注目されようとしていることは間違いない。世界遺産、日本遺産への声もあるとか聞く。だが、かつてたたらが地域の生活を支えた産業であったことさえ忘れられていた時代があった。その忘却されつつあった事実を一つずつ明らかにしていった先人たちの営みを今、振り返ることで今後への展望がえられたらと思う。

## 一 たたら研究の胎動

千種町内ではどこに行っても鉄滓が拾えるといわれる。たたら吹き製鉄の滓として放置されてきたのだが、見直されたことが一度あった。第二次大戦中の鉄鉱原料が不足した時である。『千種町史』<sup>①</sup>には、一九四三年ごろから終戦まで毎日のように鉄滓が掘り出され出荷されていたと書かれている。現在当地方に鉄滓の残存量が少ないのはそ

のためであるが、残念ながらその出荷量の記録は一切残っていないとある。

ところがこの時、時代の要請に応じて鉄滓の賦存状況とその運送方法を綿密に調査した人がいた。当時地質調査所にいた田辺健一氏<sup>2</sup>である。田辺氏は大戦末期の一九四四年に宍粟郡に入り、明治年間まで操業していた「タタラ場」の位置及び各「タタラ」鉄滓の堆積量を実地に踏査し、その結果を報告した。報告書の中に「兵庫県宍粟郡下多々羅鉄滓分布図」と谷筋ごとに集計した鉱量等の一覧表を掲載している。この分布図はその後鉄山調査の基礎資料として広く引用されることとなる。また田辺氏は实地踏査に加えて古老からの聞き取りによって、たたら製鉄の操業やその歴史についても考察を加えているし、砂鉄採取方法にかかわる輪泥へユデー<sup>3</sup>についても記述している。さらに地理学者として砂鉄採取跡地の地形に関心を持ち、人工的緩斜面であるいわゆる小奴可へおぬか<sup>4</sup>地形が宍粟郡内でも観察できることを指摘している。このように報告にはその後の研究とながる興味ある内容が含まれているし、さらに発

展させたい課題も見出せる<sup>5</sup>。一つは分布調査範囲が、目的であった鉄滓搬出に容易であった郡内西部の千草谷・志文谷に重点が置かれていて、東部地域は手薄と思われることである。二つには分布図に示された鉄滓堆積地と文献調査で明らかになっている鉄山名を対応させて場所を比定する課題である。さらには田辺氏が興味を持っていた鉄穴流<sup>6</sup>しによる地形改変<sup>6</sup>については、今後文献調査によってその時代や掘り崩し土砂量を明らかにするとともに空中写真判読や現地調査による地形学的調査が求められるだろう。

ところで、戦後いち早く地元千種でたたら遺跡に注目して調査し、一九四八年に郷土研究誌に発表<sup>7</sup>したのは千種北小学校に勤務していた小原義男氏であった。休日には校区の鉄山と呼ばれた場所を探し求めて歩いたといい、ユデー（井手）や洗い場、炭を焼いた窯の跡、カナゴ（鉄砂）を運んだ山道などの痕跡をたどっている。校区の天児屋ではまだ関係者の聞き取りが可能であった時期であり、鉄山の職種や作業内容の聞き取りをしており、その後の研究への道を開いたといえる。また、天

秤唄・鍛冶唄・鉄砂師唄の採集をしているのにも注目したい。こうしたたたら唄は後にはよく取り上げられるようになるのだが、一九五〇年代に全国の民謡を調査していた在野の民俗学者赤松啓介氏も「千草谷ではまだ鉾山唄が発掘されていない」と書いているからである<sup>8</sup>。先鞭をつけた小原氏はその後神戸大学付属住吉小学校に転出し、研究の続編を『兵庫史学』に投稿するなどした後、数年後再び帰郷してからも若手教員を誘ってたたら遺跡を探索している。社会科教育が盛んな頃で、教科や課外で郷土の人たちの生活の歴史を調べることからたたらが取り上げられるようになったと思われる。山崎高校千種分校地歴班が一九六四年に部誌『敷草の里』を創刊して砂鉄についての伝説や主なたたら遺跡などを掲載しているし、千種中学校では郷土研究部が中心となって、同六七年、運動会の日には千種鉄資料展示会を開いて公開している。こうした活動実績があつて、中高生がその翌年に始まる高保木遺跡の発掘調査に参加することになるのである。

小原氏が活動していたと同時期である一九五〇

年に、波賀町引原川上流にある音水鉄山村の民俗調査が行われた。近畿民俗学会が実施した合同調査で『奥播磨民俗採訪録』<sup>9</sup>として報告されている。音水鉄山村は明治初年でも「毎日、砂鉄を積んだ牛や馬が日に五〇頭からも運んできた」と伝えるほど穴栗郡でも最後までたたら製鉄が行われていた村で、かつては八〇戸あつたというが当時は八戸となつていた。この村に入つて聞き取りをしたのは高谷重夫氏で、「村社金山神社御由緒書」に着目して集落の移転を考察し、山内職人の種類と諸職が世襲であつたこと、その生活ぶりなどを住民から聞き取りして記録している。それぞれの家が世襲の職に因んで明治維新後姓をつけたことも記してある。このことはその後、千種でも同様であつたことが知られるようになる。明治七年（一八七四）の戸籍台帳から当時の戸主名と屋敷番号を復元し、その所在場所を示した地図も挿入されているので、鉾山集落のかつての姿を容易に思い浮かべることができる。なお、小原氏が「千種鉄（二）」で記している鉄山の職種名と作業内容が本書の記述と酷似しているが、それは天兒屋と音水

との共通性によるものなのか、高谷氏の報告を参考としたものなのかについてはわからない。

一方、千草鉄の研究は日本製鉄史をとくカギにもなると注目したのが、当時新兵庫県史の編集を<sup>11</sup>目指していた「祖先のあしあと」グループの赤松啓介・和島誠一両氏である。たたら遺跡の中心である中国地方で科学的な研究に和島氏や近藤義郎氏（岡山大学）らが着手し始めた頃で、この調査は近藤氏が岡山県和気町で始めた発掘調査に呼応した動きであった。一九五七年のことである。目的は「千草鉄が何時頃から開発されたか、交易の範囲はどの地方までだったか」を調査することであると述べている。<sup>12</sup> 第一回調査で千種北小学校の林正男教諭の協力で天兒屋鉄山など主に江戸時代末期のたたら遺跡を一三か所発見したと報じており、「千種にも中世以前にさかのぼるたたら遺跡があるはずで、今後は何とか古い時代の野ダタラを見つけない」と力を入れている。このように期待されていた本格的な調査が和島氏の指導で実現するのは、後述するようにそれから一一年後の一九六八年のことになる。なお、遺跡の調査結果か

らみて平地に近いたたらは比較的古く、山奥になるほど新しくなると指摘したり、社会経済史や民俗学との連携を示唆したりするなど発掘調査に留まらない見解を示していることをあげておきたい。

## 二 たたら関係史料の調査

宇野正磯氏はたたら研究を始めたきっかけを、後に、三〇年以上前の新聞で目にした千草鉄の記事であったと述懐しているが、この記事とは先に挙げた赤松・和島両氏らの調査を報じた神戸新聞ではないかと思われる。また、かねて聞いていた壮大な天兒屋遺跡をハイキングのおり実際に眼にしたことがこの道に入った動機であったとも語っている。<sup>14</sup> 話したのは小原氏であったかもしれない。宇野氏がたたらに関する最初の論文を発表したのは一九五八年であったから、記憶はともかくとして関心は早くからもっていたことがうかがえる。

それ以後宇野氏は資料収集とそれら地域史料に基づき研究に取り組むことになる。結成当初からたたら研究会（一九五七年創立）に加入し、そこ

からも影響を受けている。

宇野氏が研究に当たって整理した先行研究を見ても、著作としては前述したように小原義男、田辺健一両氏の論文と『奥播磨民俗探訪録』<sup>14</sup>しかなく、ほかに三枝啓介氏の「播磨刀工略史」と、「神戸新聞」の赤松氏らの記事を挙げて<sup>15</sup>いるだけである。従ってたたら業が営まれていた言い伝えはあっても、「いつ興り、いつやんだのか、作業の実際や経営、山の生活はどうだったのか。詳しいことは霧の中に閉ざされていた」と後年、振り返っている<sup>16</sup>。

中国地方ではたたら製鉄が大正時代まで操業され、たたら跡が農地となって今も集落が続いているが、宍粟郡では明治初期に閉山すると人々は移住して去り、跡地は山林に返っている。山林が国有林となり利用できなかつたからである。こうしたたたらを取り巻く社会環境の違いが播磨のたたら研究を阻んでいたと言えるだろうし、同時に奥地に残された遺跡や墓地をたどって復元することもできたのである。

宇野氏が研究に着手した頃には既にたたらを語

れる古老の伝承も断片的なものとなっており、山奥に関係者の墓碑を探してひたすら墓碑銘を調べしかかなかつたといえる。山崎の自宅からバスを乗り継いで千種の山に入り、山道を歩きまわって墓地を探すことから始めたという。その執念ともいえる探索の跡が墓碑の戒名を一字一字写し取ったフィールドノートに残されている。墓地を回るうちに鉄山関係者の檀那寺が宍粟郡内にあることが分つて、檀那寺を尋ねて過去帳を調べようになる。地域を回るとたたら関係文書の散逸が進んでおり緊急に調査する必要を痛感し、郡内外の旧家や寺社などを訪ねて史料の収集に努めるようになる。こうした墓碑名調査と史料採集の努力が『近世千草鉄山史料』上中下三冊と『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』<sup>17</sup>として結実し、一方では実地踏査と採集史料に基づいた実証的研究を次々と研究誌などに発表していく。その最初の論考「兵庫県宍粟郡における近世鉄山業について」<sup>18</sup>では元禄以後の主要宍粟鉄山について鉄滓、墓碑銘、過去帳の調査に聞き取りも加え、鉄山の移動を論じて、タラ稼行年代表も作成している。そこには既に後

の研究の原型を見る思いがする。続いて「宍粟鉄における砂鉄・木炭について」<sup>19</sup>、「近世千草鉄山について」<sup>20</sup>などを発表し、次いで研究を近世から中世へと発展させたのが「千草鉄と備前長船鍛冶―中世千草鉄研究試論」<sup>21</sup>である。また、一九六六年には千種町でたたら研究大会を開いて千草鉄を紹介している。時期的には少し遅れるが、「西播奥地民俗資料緊急調査」<sup>22</sup>にも参加している。宇野氏は「たたら作業とその慣行」などの聞き取り調査を担当しており、鉄砂採取から鉄吹きの仕事、山内での生活、たたら小屋の構造、信仰に至るまで具体的に興味深い内容を報告している。このようにして、宇野氏は忘却の淵に沈みそうであったたたら製鉄の記憶を現代に蘇らせたのである。

地元千種には宇野氏に刺激されながらたたら研究に関心をもつようになった人たちが中高の教員に何人かいた。後でふれるが高保木遺跡の発掘に参加したのは伊和高にいた宇野氏のほか、佐用高の村上紘揚氏、山崎高校千種分校の桑田宏三氏、千種中の上山勝氏・城内義夫氏らである。その中で上山勝氏はたたら研究の成果をまとめて一九六

八年には『広報ちくさ』に一年間、「祖先のあしあと 千草鉄の製造」<sup>23</sup>を連載し、地域の歴史に刻まれた千草鉄を広く町民に紹介している。

同じ頃、町の文化財審議委員長であった井口二四雄氏も千草鉄の研究を進めていた。宇野氏や上山氏の著作を引用しながら、一九七五年に『ちくさ鋼に就て』<sup>24</sup>を刊行している。砂鉄の採取に始まる鉄の生産・流通から鉄山労務者の生活や民俗にいたるまで、体系的ではないが当時知りうる限りのたたらに関する知見をまとめたものであった。町内で史料の発掘が本格的に行われるようになったのもこの年、千種町史編集作業が始まってからである。<sup>25</sup>井口氏は同じ文化財審議委員であった池田数夫・鳥羽弘毅の両氏とともに町内の大庄屋・庄屋などの旧家や寺院、各公民館の所蔵文書を悉皆調査し、さらに町外へも探索の手を広げている。鳥羽氏がたたら研究会で教えられた富山県立図書館の文書を入手したのもその例である。当然だが文書だけではなく関係者からの聞き取りや町内の墓碑や供養碑、たたら遺跡や鉄砂仕上げ場跡の实地調査も行っている。そうした史料収集と研究の

成果が一九八三年に刊行された『千種町史』に「鉄山の支配と経営」などとして盛り込まれ、同時に『たたらと村と百姓たち―千草鉄関係史料集』（千種町）として発行されている。その前年には収集した史料や発掘された遺物などを展示する“千草鉄の館”とも呼ばれる歴史民俗資料館が開館している。一方では刀匠たちの間で千草鉄復興の動きがあり、一九七五年には町内で千草鋼再現実験が行われるという一齣もあつた<sup>26</sup>。

ともあれ、たたらがようやく地域で人々に、目に見えるかたちで示されるようになったのである。宍粟郡内各町でも『千種町史』と前後して町史が発刊されており、ここでもたたら製鉄が地域の歴史の中に書き込まれるようになっていく。

鳥羽氏らは町史刊行後も一九八六年から五年間、千種町と南光町の鉄山墓の調査と寺院の過去帳調査を行うなど精力的に研究を進めている。研究成果は『たたらと村―千草鉄とその周辺―』<sup>27</sup>にまとめられ、生徒用副読本『たたら<sup>28</sup>の里 ちくさ』<sup>28</sup>に生かされている。鳥羽氏らの研究はその書名にも表れているように、地域の暮らしの中でたたらを

取り上げているところにほかには見られない視点があつたと考える。

### 三 たたら製鉄遺跡の発掘調査

たたら研究には文献や民俗調査に加えて考古学的発掘を行う総合的調査が必要であるが、播磨では学術的な発掘調査が遅れていた。はじめて本格的な学術調査が行われたのは、一九六八年の高保木遺跡<sup>29</sup>である。杉苗畑の造成中にたまたま発見された遺跡で、和島誠一氏の指導のもとで緊急調査の体制が組まれた。調査団には専門家に混じって地元の中学・高校の教師や生徒も参加し、地域から高い関心が寄せられた。発掘は千種北小学校裏山斜面と対岸の扇状地末端平坦地の二か所で行われた。裏山斜面では炭を詰めて防湿し、その上に西洋風呂様（長方形箱型炉）のたたらを築いており、平坦地では真下だけでなく周囲にも小判型に防湿を施したうえで同様のたたらを築いていた。いずれも野だたらで平坦地の方がより新しいとされたが、ともに近世の永代たたらへの過渡期のも

のとされている<sup>30)</sup>。

次いで画期的な発掘とされるのが、古代にさかのぼる南光町の西下野製鉄遺跡である。中国自動車道建設にともない、一九七二、七三年に兵庫県教育委員会によって調査された。長方形箱型炉五基などを検出し、工房も伴っており、出土土器から奈良時代初頭と考えられている<sup>31)</sup>。

地元で発掘調査が待たれていたのが天児屋鉄山跡である。千種町教育委員会では古老の話をもとに製鉄施設の配置想定図も作っていたが正確なものかどうか断定できずにいたのである。再三文化庁に調査を依頼していたが、ようやく一九七九年から国庫補助を受けて調査が始まり、その後三次にわたって実施された<sup>32)</sup>。調査員は千種高の村上紘揚氏と土万小の城内義夫氏である。第一次（七九〇年）では詳細な測量図を作成して西山遺跡の発掘を行い、遺跡が先の想定図とほぼ一致することを確認している。第二次（八三〇～八四四年）では東部壇上部を調査し、職人の豪華な生活ぶりを伝える伝承とはうらはらに、山内小屋は極めて粗末な建物であったとみられるとしている。第三次

（八四〇～八五五年）では鉦跡を発掘し、地下構造に大舟、小舟の施設を備えていることを確認し、大型炉の使用による大量生産であったと推定している。ただ、以後の保存管理方法を考慮して地下二階の構造の発掘は中断し、遺構はそのまま現状保存としている。その後、この一帯は整備されたたら公園となり、民俗資料館を発展させたたたらに、天児屋鉄山は近世から明治にかけて操業したたたら跡として兵庫県指定文化財として指定された。

生産遺跡として兵庫県で製鉄遺跡の詳細分布調査が始まるのは一九八八年からである。文化庁文化財部が『月刊文化財』で生産遺跡（たたら）を特集してから一〇年目であった。第一次は佐用郡で行われ、主担当は平瀬順一氏であった。調査結果、郡内の鉄生産遺跡数は従来の遺跡図および地名表よりも大幅に増えて一四四遺跡を数え、一一八遺跡が鉄製錬遺跡（狭義の製鉄遺跡）と考えられた<sup>33)</sup>。特色はこれら比較的小規模な遺跡が群在し、奈良―平安期に該当するものが多いことから風土



記の記述を裏付けるものと考えられている。

第二次では波賀町が調査対象とされた。波賀町は宍粟郡では文献調査の成果で多くの鉄山名が知られ、現地名との比定もある程度進んでいるが、その中で今ひとつ分布状況が不明確であったからである。分布調査の結果は従来どおりで製鉄関係（スラグ確認）七九遺跡を含む一三〇遺跡であった。<sup>34</sup>うち七四遺跡が鉄製錬遺跡と考えられている。

だが、今回の踏査はなお不十分で未確認の遺跡がまだ相当数あるとみられている。今回の調査目的の一つが文献研究の成果と合わせ考察できるようにすることであったので、上記の内三三遺跡を文献との対比が可能と思われる近世鉄山としている。これら遺跡（鉄山）は山林資源（木炭）の利用を考慮して谷の入口部や合流部などに立地しており、その谷部に沿った山林区を一つの鉄山区と設定する試みをしている。これによると波賀町域の近世たたら製鉄遺跡は一五鉄山区のいずれかに所属することになる。これらとは別にまた、高殿出現以前と考えられる前近世製鉄遺跡一七か所は町域南部に集中しており、花崗岩地帯で原料砂鉄立地と

思われる。鉄穴洗場や井手など鉄穴流し関係遺跡も調査しているが、さらに詳細な調査が必要としている。また、山方役所が指定した「鉄山炭山拾壺ヶ所」の実態やまだ不明の鉄山名称の解明など今後一層文献研究も望まれるところである。

おわりに

先人たちの努力によって播磨のたたら製鉄のわたしがしだいに明らかにされてきたが、それだけにさらに課題が見えてきたともいえる。なによりも古代から近世までのたたら製鉄の消長をあとづけるだけの遺跡の確認がされていない。古代の『播磨風土記』の記事を裏付ける製鉄遺跡が佐用郡では発見されているが、中世と推定されるのは安積山遺跡や高保木遺跡・小茅野後山遺跡<sup>35</sup>などであり、近世でも確認されているのは一八世紀以降の遺跡である。それらの間をつなぐ遺跡がまだ知られていない。また、近世のたたら製鉄炉の地下構造を明らかにする発掘調査もまた報告されていない。中国地方では既に地下構造の変遷が地域で

異なることや、生産内容も経営者によって大きく違っていることを明らかにし、たたら製鉄に地域性があることを示している。

中国地方との比較検証にたえられるだけの実績を挙げるには、先人の業績を継承しながら課題を明らかにし、考古学的な発掘調査と文献史学による史・資料調査に加えて地形学的方法なども取り入れるなど総合的な取り組みが必要となろう。たたらには今、こうした学術研究の面だけではなく、先に述べたように教育や観光、地域づくりなどの面からも価値が見出されようとしている。将来はより幅広い人たちが関わることによって、たたら製鉄遺跡に新しい価値が付与され、地域で保全され、活かされることになるだろう。それはまた、先人たちの労苦に報いることでもあるに違いない。

- (1) 『千種町史』昭和時代・物資の動員の項参照（一九八三年）。
- (2) 田辺健一「兵庫県宍粟郡下の『タタラ』鉄滓調査報告」（『東北地理』八一―一、一九五五年）。
- (3) 井手を発音のまま輪泥と表記したものと思われる。
- (4) 広島県北東部の小奴可地区（現東城市）に顕著に

みられる砂鉄採取による改変地形。この研究は一九六〇年代から始まるといわれるから、それに先立つかなり早い時期での指摘である。

- (5) 土佐雅彦氏の報告「戦前期の宍粟郡下のたたら鉄滓調査報告をめぐって」（たたら製鉄研究班第二回研究会、二〇一七年）による。

- (6) 赤木祥彦・貞方昇「高梁川流域の鉄穴流しによる地形改変と水田開発」（『人文地理』四〇―三、一九八八年）。県下では田中真吾氏が赤木氏にならって空中写真判読や現地調査で鉄穴流し跡地が棚田となっていることを指摘しているが、それ以上の研究はまだない（『兵庫の地理 地形でよむ大地の歴史』のじぎく文庫、二〇〇七年）。

- (7) 小原義男「千種鉄（一）」（『志佐波』二一一、宍粟郷土研究会、一九四八年）。同「千種鉄（二）」（『兵庫史学』四、一九五五年）。右とほぼ同じ内容である。

同「千種鉄（二）」（『兵庫史学』一〇、一九五六年）。

- (8) 赤松啓介編者代表『民謡風土記』（のじぎく文庫、一九六〇年）。

- (9) 錦耕三・平山敏治郎編、近畿民俗学会発行、一九五三年。「奥谷村音水」の箇所は『波賀町史』に転載されている。

- (10) 両者はムラゲ・カジ（音水ではカジヤ）・サゲ・バンコ・ツチホリ・ヤマゴの七種とも共通し、ほか

に小原氏は鉄砂師（鉄穴師）を、高谷氏はオヤカタ（鉄山経営者）を挙げている。こうした山内の分業を、後に鳥羽弘毅氏は四つに大別し「たたら職制組織表」にまとめている（『たたらと村―千草鉄とその周辺―』千種町教育委員会、一九九七年）。

(11) 当時研究成果を神戸新聞に「祖先のあしあと」として連載しており、後にのじぎく文庫で公刊される（『祖先のあしあと』全四巻、一九五八〜六一年）。ただし、千草鉄については成果が得られなかったか記述はない。

(12) 『神戸新聞』（昭和三二年一〇月二三日付）が「宍粟郡中心に千草鉄にメス」の見出しで報じている。

(13) 「ひょうご地域史最前線八 千草鉄宇野正碓さん」（『神戸新聞』昭和六三年七月二三日付）。

(14) 宇野正碓・上山勝対談「奥播磨で鉄がつくられていた」（『ニューひょうご』二四、一九六九年）。

(15) 宇野正碓「宍粟鉄について」（『宍粟郷土研究会報』一、一九五八年）。

(16) 前掲註（13）による。

(17) 宇野正碓『近世千草鉄山史料』上（一九六六年）・中（一九六八年）・下（一九七〇年）、いずれも私家版。『宍粟鉄山並金屋鑄物史料』（是川文庫、一九八九年）。

(18) 『研究紀要』一（たたら研究会、一九五八年）。その後各論的な報告「宍粟鉄の販路」「宍粟郡の近世産業（一〜四）」「宍粟鉄山の経営者（一〜三）」「鉄山

炭山の指定」を『宍粟郷土研究会報』第三号から三号にかけて一〇年間にわたって発表した。

(19) 兵庫県立教育研修所『昭和三十四年度研修生報告』（一九六〇年）。

(20) 『兵庫史学』五一、一九六九年。ほかに「千草鉄山」（『兵庫県の歴史』三、一九七〇年）、「中・近世の千草鉄」（『高保木製鉄遺跡』）もある。

(21) 『日本製鉄史論』所収、たたら研究会、一九七〇年。この前に「千草鋼と長船鍛冶」（『宍粟郷土研究会報』二七、一九六七年）がある。

(22) カンナ井手・鉄山墓等を記入した「西河内・河内関係地図」を作成している。兵庫県民俗調査報告4『千種 西播奥地民俗資料緊急調査報告』（兵庫県教育委員会、一九七二年）。

(23) 後に内容を改訂して「奥播磨の製鉄史―たたらへの解明」とし『宍粟郷土研究会報』八一（一九九三年）・八三（一九九四年）に発表している。

(24) 自然と文化のふるさとづくり実行委員会の編集。

(25) 鳥羽弘毅『想い出の記』、二〇一二年、私家版。

(26) 前掲註（1）。日本美術刀剣保存協会は一九七七年に鳥根県で「日刀保たたら」として復元している。

(27) 鳥羽弘毅前掲註（10）の『たたらと村』。この著作に先立って、論文として「兵庫県宍粟・佐用郡のたたらへの伝承と鉄の神々」（『備前刀研究』二、一九九一年）と「播州宍粟郡の近世たたら―山内の分業・生活並に村・百姓とのかかわり―」（一）〜（五）

(『備前刀研究』三〇七、一九九一〜九二年)、「谷間をこがす『まがね』の炎」(『バンカル』一九九五夏号、姫路市文化振興財団)を發表している。また、一九九〇年、『広報ちくさ』に「たたらと村―千草鉄とその周辺―」を連載した。

(28) 鳥羽弘毅『たたら里 ちくさ〜千草鉄(六粟鉄)の歴史副読本〜』(千種町教育委員会、一九九七年)。小中学生向けの副読本で、この年四月のたたら里学習館開設にあわせたものである。

(29) 発掘速報としては、リーフレット『千種のたたら』(和島誠一、一九六八年、千種町教育委員会)、上山勝「千種地区におけるタタラ製鉄遺跡の発掘」(『六粟郷土研究会報』三一、一九六八年)などがあるが、和島氏の死去によって正式な報告書が作成されなかった。『高保木製鉄遺跡』(千種町教育委員会、一九八九年)は二二年後に調査員の一人であった丸山竜平氏を中心となつてまとめたものである。

(30) 土佐雅彦氏は高保木遺跡にみられる粘土ブロック堤は中世を通じて発達してきた「播磨型」ともいえる地下構造だとする(「播磨の鉄」へ櫃本誠一編『風土記の考古学②「播磨風土記」の巻』同成社、一九九四年)。角田徳幸氏も高保木遺跡は粘土ブロック帯で囲み本床状遺構を構成する地下構造であり、一四世紀に播磨に現れた独自の型だと認めている(『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂、二〇一四年)。

(31) 村上紘揚ほか「西下野製鉄遺跡」(『中国縦貫自動

車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 佐用郡』兵庫県教育委員会、一九七六年)。稲田孝司氏も全国的に見ても奈良時代前半にまで遡る良好な遺跡の一つであるとしている(『日本の製鉄遺跡』へ『月刊文化財』十一月号、一九七九年)。

(32) 第一次調査Ⅱ村上紘揚「播磨における製鉄遺跡の調査―中世から近世の千種町製鉄遺跡」(『歴史手帖』九一八、名著出版、一九八一年)。

第二次調査Ⅱ『昭和五八年度千種町天児屋タタラ遺跡発掘調査実施報告書』千種町教育委員会、一九八四年。

第三次調査Ⅱ『昭和五九年度千種町天児屋タタラ遺跡発掘調査実施報告書』千種町教育委員会、一九八五年。

(33) 『製鉄遺跡Ⅰ(佐用郡)』兵庫県生産遺跡調査報告第一冊、兵庫県教育委員会、一九九二年。

(34) 土佐雅彦「遺跡の分布状況(分布調査結果)」(『製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』兵庫県生産遺跡調査報告第五冊、兵庫県教育委員会、一九九四年)。

(35) 『小茅野後山遺跡』兵庫県文化財調査報告第三一三冊、二〇〇七年。